

令和 5 年 5 月 4 日現在

機関番号：32519

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00511

研究課題名（和文）「人新世」という地球史の概念による現代文学の分析と評価-その展望と課題

研究課題名（英文）Analysis and Evaluation of Contemporary Literature Based on the Earth History Concept of "Anthropocene": Its Prospects and Challenges

研究代表者

芳賀 浩一 (Haga, Koichi)

城西国際大学・国際人文学部・教授

研究者番号：70647635

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：2000年に大気科学者のパウル・クルツェンが現代を完新世ではなく「人新世」（the Anthropocene）であると主張して以来、「人新世」という言葉は科学のみならず人文学の各分野に影響を及ぼした。文学研究の分野も例外ではなく、2010年代に入ると英語圏を中心に「人新世」を冠した文学論や研究論文が続々と出版されるようになった。本研究はこの「人新世」の概念が過去20年余りの間に文学研究においてどのような議論を生んできたかをテーマ毎に整理・分析し、これからの文学研究が進む方向性を示すことを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「人新世」というタームは2000年代に英語圏の人文学の分野で使われるようになり、2010年頃からは文学作品の背景やテーマとして「人新世」の概念が参照されるようにもなった。日本においては2010年代後半から人新世を論じる書物が現れ理解も進んだが、文学研究においてこの概念が用いられることは稀である。本研究は「人新世」についての英語圏と日本の間の溝を埋め、この概念の社会的認知度を高めると同時に、文学研究の分野において「人新世」が提起している課題を明示した点に学術的な意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Since 2000, when atmospheric scientist Paul Crutzen claimed that the present era is not the Holocene but the Anthropocene, the term "Anthropocene" has influenced not only the scientific community but also various fields of the humanities. The field of literary studies is no exception, and in the 2010s, a growing number of literary treatises and research papers on the Anthropocene have been published, mainly in the English-speaking world. This study attempts to organize and analyze, theme by theme, how the concept of the "Anthropocene" has generated debate in literary studies over the past two decades, and to show the direction that future literary studies may take.

研究分野：比較文学、文学理論

キーワード：エコクリティシズム 人新世 文学理論 環境批評

1. 研究開始当初の背景

(1) 筆者はアメリカで文学理論を広く学び、帰国後は文学・環境学会等でエコクリティシズム(環境批評)の方法を用いた文学の分析を行い、同時に書評などを通してアーシュラ・ハイザやティモシー・モートンなどまだ日本では知られていないエコクリティシズムの批評家を日本に紹介してきた。

(2) 筆者が取り組んできた「エコクリティシズム(環境批評)」の分野は、1980年代にアメリカを中心に始まり、1993年に文学と環境学会(A S L E)が組織され、翌年には日本でも同様の学会が立ち上げられている。また、エコクリティシズムは、1960年代を中心に起こった構造主義とポスト構造主義に影響された批評(ポストコロニアル、ジェンダー等)の後に来る「環境」を視座とする批評として21世紀に入ってから注目を集め、現在欧米はもとより、東アジア、東南アジア、オーストラリア、インド、トルコなど世界中に広がりつつある批評の形態でもある。

初期のエコクリティシズムは土地や科学との関係を重視してきたが、2010年代に入ると記号を含めたあらゆる物の相互作用を重視する「新物質主義」を中心とする思想が主流となった。筆者はこの立場からの分析を拙論「日野啓三の文学における物質的環境批評」や「東日本大震災から読む佐伯一麦『還れぬ家』」等で試みてきた。

そして2010年代に「新物質主義」のエコクリティシズムに大きな影響を与えたのが「人新世」(The Anthropocene)の概念である。人新世とは2000年にクルツェンとストーマーが提唱した地球の新たな地質年代で、人間が地球上の生物を圧倒し自らの手で地球環境を変えてしまうようになった時代を意味する。2010年以降、人文学においても『環境人文学 人新世からの声』(Environmental Humanities-Voices from the Anthropocene, 2017年)や『人新世における動物を考える』(Thinking About Animals in the Age of the Anthropocene, 2016年)、『人新世の衝撃』(The Shock of the Anthropocene, 2015年)、『人新世の小説』(Anthropocene Fictions, 2015年)、『人類が変えた地球:新時代アントロポセンに生きる』(Adventures in the Anthropocene, 2014年)など、人新世に関する数多くの英文書籍が出版された。一方で日本語による研究成果は『エコクリティシズムの波を超えて 人新世の地球を生きる』などいくつか散見されるが、いずれも人新世に関する本格的な研究ではなかった(本研究期間中に本格的な書籍が出版されるようになったが、文学研究における空白は解消されていない)。日本においては残念ながら欧米ほど学際的なアプローチが受け入れられていないため、こうした多角的な枠の中に文学作品を取り込んでいくという研究はほとんど見られないのが現状である。よって筆者は、世界のエコクリティシズムの動向と直接つながることによって日本文学における学際的研究の空白を埋め、「人新世」という地球科学の概念が文学作品の評価・分析に用いられることで生まれる新しい可能性と問題点を明らかにすることに学術的研究意義があると考えた。

2. 研究の目的

(1) 極めて学際的な分野である英語圏のエコクリティシズム(環境批評)において「人新世」の概念は賛否両論を巻き起こしながら既に大きな枠組みとして機能している。コーエン、スロビック、カリコット、ウィーラーなどエコクリティシズムの有力な研究者たちが寄稿した『環境人文学 人新世からの声』(2017年)などはその一例である。しかし、「人新世」という地球科学で唱えられた概念の人文学・環境批評・文学研究への越境そのものについての研究調査はまだなされていない。また、日本の文学研究においてはまず環境の視点からの分析が宮澤賢治や石牟礼道子などごく一部の作家を除いてほとんど行われていない現状がある。世界的な「人新世」概念の隆盛をきっかけに、日本の文学研究も環境というテーマに向き合うことが求められており、本研究はその一翼を担っている。

(2) 本研究の大きな目的は、地球環境という枠組みと問題意識において文学を分析・評価する方法を示すことである。そのために本研究は、1)まだ解明されていない地球科学と文学の学際研究における問題点と可能性を明らかにしたうえで、2)東日本大震災等をきっかけとして人間と地球環境の関係の再考察が進んだ日本社会が生んだ2010年代の日本文学を「人新世」という学際的な枠組みにおいて評価・分析する。本研究は現在エコクリティシズムの最前線にある世界の研究者たちが行っている研究を日本においても行うだけでなく、日本の自然・社会環境でこそ成し得る独創的な文学研究となることも目指している。さらに、東日本大震災後の文学研究は、世界的な「人新世」の概念に対する日本における事例研究として、普遍的概念と地域的・文学的实践の相関関係を検証することを可能にする。本研究は、抽象的な概念と物質的な現象の間で創造される「人新世」や「文学」の姿を環境の視点から明らかにするものである。

(3) エコクリティシズムによる日本の文学・文化研究は、英語圏を中心に広まっている「人新世」や「ポスト人間」の概念に英語圏以外の事例と分析を提示することで多様性をもたらす。「環境」の法や社会認識は確実にグローバルな波として世界に影響を与えており、日本もまたその例

外ではない。しかし、2010年代の日本文学は日本に特有の環境や歴史性を反映し、英語圏とは異なる人間・地球の関係の在り方を表現した。本研究は、日本に特有の環境から生まれた文学作品の意義をグローバルな環境概念の中に位置づけることによって、グローバルな概念を日本化し、日本文学の特異性をグローバル化するものである。それにより本研究が人文学に対する日本からの貢献となることが最終的な目的となる。

3. 研究の方法

城西国際大学にある筆者の研究室には、エコクリティシズムの重要な論文集と書籍、日米の文学・環境学会誌など、研究の出発点となる資料は一通り揃っている。東日本大震災をテーマとする文学作品も200点以上所蔵している。また大学図書館には比較的多くの英米文学、日本現代文学の作品と環境関連書籍が所蔵されている。

筆者が当初3年という研究期間内で以下の内容を実施することを考えていた。

- ① 2000年にクルツェンとストーマーが「人新世」の概念を提唱する以前の環境と人間についての言説・概念を調査・整理する。
- ② 地球科学の分野で提唱された概念が2000年以降英語圏においていかに人文学へ輸入され文学の分析に適用されるようになったかを調査分析し、学際的な文学研究による成果と問題点を整理する。
- ③ 英語圏の人文学で2010年頃から盛んに用いられるようになった「人新世」の概念がどのような経路で日本語圏に持ち込まれているかを調査し、さらに人文学の分野で普及しているのか、あるいはしていないのかについて分析を加える。
- ④ 「人新世」の概念を評価の大きな枠組みとして2010年代の日本文学を分析することにより文学実践の世界的な同時性、または概念生成と実践活動の相関関係を検証する。

上記の調査分析結果を学会等で公表し、ひろく意見を求める。

、は平成30年度から平行して進められる予定である。ただし、は研究対象となる概念の越境の前史にあたるため、当面は、が中心となる。平成31年度からへ向かって～をまとめていく。

上記の調査研究を進めることによって「人新世」概念の人文学・環境批評への越境過程を実証的に解明し、そこで生まれた新しい評価の方法と成果、さらにそれによって生じた問題について考察する。そして「人新世」の概念が日本文学に適用されることによって生じる可能性と問題について英語圏における事例と比較する。この比較分析を通して、日本における学際的な文学研究のひとつの在り方を示すと共に、東日本大震災後の日本文学が英語圏のエコクリティシズムにおいては認識されていなかった「人新世」の新たな意味を表現していることを明らかにしたいと考えている。

しかし2020年度からコロナ禍において海外渡航が不可能となり多くの学会が中止や延期となったばかりか、国際的な書籍の流通も滞ったため上記の方法の一部が変更を余儀なくされ、さらに2年の研究期間延長をも必要とした。2021年からは学会のオンライン開催が盛んになり、一定程度の学術活動を行うことが可能となったが、当初想定していた交流や情報交換の機会が多くが失われ、書籍の整理と分析を中心にせざるを得なくなった。

4. 研究成果

本科研費による成果としては、まず英文書籍2冊（単著1，共著1）が挙げられる。

The Earth Writes: the Great Earthquake and the Novel in Post-3.11 Japan. (Lexington Books, 2019)

“The Peaceful Use of Nuclear Power and Post 311 Novels,” *Mushroom Clouds: Ecocritical Approaches to Militarization and the Environment in East Asia* (Routledge, 2021, pp.96-106)

1は東日本大震災後の日本の文学作品について整理と分析を行ったものであり、米国において書評もされている。は東アジアにおける軍事的行為と環境破壊をテーマとした共著本で筆者はその第6章を担当し、東日本大震災後の日本の小説が原子力をどのように描いているかについて池澤夏樹、高嶋哲夫、多和田葉子の作品を取り上げて論じた。

さらに和文の単著書籍として『ポスト 3.11 小説論 遅い暴力に抗する人新世の思想』（水声社、2018年）がある。これは人新世の概念を枠組みとしつつ、カナダ出身の作家ルース・オゼキ等の作品も含め、東日本大震災後の文学作品を蒐集し分析したものである。

また、論文・論考としての成果に下記の3点が挙げられる。

「気候変動をめぐる「遅い暴力」と現代文学の射程」(『現代思想』、2020年、136 - 143頁)
「東日本大震災後の小説と人新世における「ゴミ」、「動物」、そして「人間」 木村友佑
『野良ピトたちの燃え上がる肖像』を中心に」(名古屋大学大学院人文学研究科・文学部超
域文化社会センター『Juncture』第12号、2021年、38 - 55頁)
「文学批評における『人新世』 - 4つの論点」(城西国際大学大学院紀要第26号、2023年、
1 - 15頁)

は高村薫の『土の記』を人新世と気候変動という視点から分析したものであり、は木村友佑の作品を人新世における廃棄物の問題という視点から人間と動物の関係性を論じたものである。そしては科研期間中に収集した人新世をテーマとする英語文献を整理して内容を4つの論点にまとめ、その内容と今後の課題を論じたものである。人新世の議論は広範にわたるが、特に文学研究にとって重要な論点として「人間」、「オルタナティブ」、「スケール」、「ポストコロナル」の4つに焦点を当てた。人間が地球環境を改変した時代である「人新世」という概念は、他の生物とは隔絶した「人間」の在り方を見直し、地球環境という規模で時空間を捉える必要性を人文学にもたらしめている。この「人新世」による時空間の枠組みの変化の中でこれからの文学研究に求められる新たな考え方を示すことにより、文学研究における「人新世」の課題を明らかにした。これにより筆者は科研の研究目的を部分的ながら達成したと考えている。

さらに研究発表・講演には以下のものがある。

“Nuclear Power and Post-3.11 Novels” (6th International Symposium on Literature and Environment in East Asia. 於台湾師範大学、2018年)
“Reading Post 3.11 Novels as a Response to The Great Derangement” (ASLE Conference, University of California, Davis. 2019)
「冷戦後の文化理論としてのエコクリティシズム」(近代文学三学会合同国際研究集会、於共立女子大学、2019年)
「瓦礫、ゴミ、放射能 ポスト3.11文学における廃棄物のエージェンシー」(名古屋大学・超域文化社会センター・TCS国際シンポジウム、2019年)
“Post 311 Literature and the Anthropocene” (フランス国立東洋文化大学、オンライン、2021年)
“From Restoration to the Past of a Future-ecological literary imagination in post-3.11 fictions” (7th International Symposium on Literature and Environment East Asia. Kobe, Japan、オンライン、2021年)

上記の発表・講演はいずれも「人新世」という枠組みを用いて文学作品を論じたものであり、本科研費による研究成果を国内外に発信する機会となった。2021年～22年度は、全ての発表がオンライン形式で行われた。対面での交流の機会が失われた一方、オンラインを用いることで従来の学会を遥かに超える聴衆が参加したケースもあり、成果の公表という意味ではオンラインによるプラスの効果が見られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 芳賀 浩一	4. 巻 26
2. 論文標題 文学批評における「人新世」 4つの論点	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 城西国際大学大学院紀要	6. 最初と最後の頁 1, 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 芳賀浩一	4. 巻 12
2. 論文標題 東日本大震災後の小説と人新世における『ゴミ』、『動物』、そして『人間』 木村友佑『野良ビトたちの燃え上がる肖像を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Juncture	6. 最初と最後の頁 38,55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/juncture.12.38	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Koichi Haga
2. 発表標題 From Restoration to the Past of a Future ecological literary imagination in post-3.11 fictions
3. 学会等名 The Seventh International Symposium of Literature and Environment in East Asia (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Koichi Haga
2. 発表標題 Post-3.11Literature in the Anthropocene
3. 学会等名 Ecrire la catastrophe -10 ans apres le 11 mars 2011 (十年後の3.11-震災をどう描くか) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Koichi Haga
2. 発表標題 Reading Post 3.11 Novels as a Response to The Great Derangement
3. 学会等名 Association for Literature and Environment (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 芳賀浩一
2. 発表標題 冷戦後の文化理論としてのエコクリティシズム
3. 学会等名 近代文学三学会合同国際研究集会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koichi Haga/芳賀浩一
2. 発表標題 Debris, Garbage, and Radioactivity: Agencies of Waste in Post 3.11 Literature/瓦礫、ゴミ、放射能-ポスト3.11文学における廃棄物のエージェンシー
3. 学会等名 名古屋大学・超域文化社会センター・TCS国際シンポジウム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Koichi Haga
2. 発表標題 The Peaceful Use of Military Technology and the Post 3.11 Novels.
3. 学会等名 2018 International Symposium on Literature and Environment in East Asia (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Doo-ho Shin, Catherine Diamond, Weibon Wu, Hsinya Huang and Syaman Rapongan, Shinji Iwamasa, Koichi Haga, Iping Liang, Young-hyun Lee, Simon Estok, Kathryn Yalan Chang, Kazuaki Odani	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Reutledge	5. 総ページ数 212
3. 書名 Mushroom Clouds Ecocritical Approaches to Militarization and the Environment in East Asia	

1. 著者名 Koichi Haga	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Lexington Books	5. 総ページ数 148
3. 書名 The Earth Writes : the Great Earthquake and the novel in post-3/11 Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------